

主 題：嵐の中で出会う神の御子**聖書箇所：ヨハネの福音書 6章16－21節**

この朝、皆さんと見ていきたいのはヨハネの福音書6章のみことばです。先週から6章に入り、そこに記されている大切な真理を学び始めました。今回もその続き特に16－21節を中心に一緒に考えてみたいと思います。

ヨハネ6：16－21

「:16 夕方になって、弟子たちは湖畔に降りて行った。:17 そして、舟に乗り込み、カペナウムのほうへ湖を渡っていた。すでに暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。:18 湖は吹きまくる強風に荒れ始めた。:19 こうして、四、五キロメートルほどこぎ出したころ、彼らは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、恐れた。:20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」:21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。舟はほどなく目的の地に着いた。」

皆さんはジョニー・エリクソン・タダというひとりの女性を知っているでしょうか？彼女はスポーツ万能の家庭に生まれ育ち、幼いころからテニスや水泳などに励む活発な少女でした。しかし、そんな希望や夢にあふれていた彼女の将来は一瞬にして終わりを迎えることになります。高校の卒業式を終えた数週間後のこと、大学に行く準備をしていたジョニーは姉のキャシーに誘われて一緒に泳ぎに行くのです。そして、着いた浜辺で勢いよく水に飛び込むと思ったよりも底が浅くて、彼女は思いつき海底に頭を打ちつけてしまうのです。悲しいことにこの事故によって、彼女は肩から下が完全に麻痺してしまう四肢麻痺になりました。まさに一瞬の出来事でした。しかし、その一瞬で彼女が思い描いていたものや望んでいたものは何もかもできなくなりました。夢見ていたものはすべてその瞬間に消え失せ、終わることのない車椅子生活を余儀なくされてしまうのです。容易に想像できると思います。この事件の後、ジョニーは大いに苦しみました。長時間にわたってさまざまな手術を受けて、病院の中で先の見えない絶望的な時間を過ごす経験をする中で、彼女はすべてを諦めてしまいそうになることもありました。彼女は今も変わらずにすばらしい働きをしている信仰者です。しかし、そんな彼女でもかつて悲惨な状況の中にあって、このような苦痛にあふれた祈りを口にすることがありました。彼女はこのように祈りました。「神様、あなたは凄い。よくやったよ。私はクリスチャンになったばかりなのに、これが新しいクリスチャンに対する扱いなの？まだ信仰も幼いのに。私はもっとあなたと親しくなりたいと祈ったのに。もしこれがその祈りの答えだと言うなら、もう二度と祈ったりなんかしない。自分の存在が嫌でたまらない。」と。ジョニーの祈りは切実なものでした。彼女は置かれた状況の中で、いったい神様はどこにいるのかと混乱していたのです。ただこれは彼女に限った話でもないでしょう。

私たちひとりひとりも普段の生活の中で、大小さまざまな試練や困難に直面することはあります。苦しみも重荷も難しさも経験し、同じように心が沈んで嘆くような時もあるでしょう。もちろんそんな場面に直面すれば、私たちはみことばに立って主に信頼することが大切だと知っているからこそ、そのとおりに実践して生きていこうともするでしょう。しかし、もしその問題が自分が思い描いていたより長引けばどうするのでしょうか？どれだけ祈ったとしても困難が解決せず、まるで神様が遠く離れているかのように感じたとしたら、神様が何をしているのか自分にはいっこうに理解できなかったとしたら、私たちどうするのでしょうか？果たして、そのような吹き荒れている嵐の中で、変わらずに主に信頼し続けることはできるのでしょうか？まわりを見渡してみたらただ悲しみに暮れるしかない状況の中で、そもそも期待や希望や平安を見いだすことができるのでしょうか？感謝なことは、みことばはその答えを明白に教えてくれています。

○嵐の中で出会うイエス様：三つの特徴

この朝、皆さんと一緒に学んでいくみことばは、有名なストーリーの一つ、湖の上を歩かれたイエス様です。先週、学んだことを覚えていますか？5つのパンと2匹の魚だけで多くの群衆を養うことのできたイエス様の力は、私たちの想像を遥かに超えた圧倒的なものでした。しかし、きょうこれから私たちが見ていく場面には、イエス様の偉大さがさらにはっきりと示されています。特に、今回の箇所から私たちは激しい嵐の中で出会うことができるイエス様の三つの偉大な特徴を見て取ることができます。たといひどい困難の中にあっても、変わらずに希望を見いだすことのできる張本人——イエス様の姿にきょうは一緒に目を留めてみたいと思います。もし今この中で試練を味わっている人がいるのであれば、そしてこれから味わう時があれば、願わくば、このみことばが励ましになることを心から願っています。

1. イエス様は嵐の中へ送られる方 16-19a節

では、早速一つ目の特徴から考えてみましょう。それは、イエス様は嵐の中へ送られる方です。イエス様はご自分の愛している者たちを意図的に嵐の中へと進ませることがあるということです。どういう意味か、みことばを見てください。16節からこのように始まっていました。「16 夕方になって、弟子たちは湖畔に降りて行った。 17 そして、舟に乗り込み、カペナウムのほうへ湖を渡っていた。すでに暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。」と。この16-17節を読むと、何か弟子たちが自分たちの意志で舟に乗り込んで、そしてガリラヤ湖を渡り始めたかのようにも見えるかもしれません。しかし、実際はそうではありませんでした。同じように今回の出来事が書かれている別の福音書を見ると、より詳細な情景が描かれています。マルコ6:45を見てください。このように言われていました。「それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。」と。読み取れましたか？弟子たちは自分たちから舟に乗ったのではありません。イエス様ご自身が彼らに舟に乗るようにと強いていました。

▶「強いて」

この「強いて」ということばは、もともと「力で服従させる」とか「説得して無理やり何かをさせる」という意味が含まれていました。何かをしたくないとごねている人たちや、ぶつぶつ文句を言っていた人たちに強制的にそれをさせる様子が「強いて」ということばが持っている意味でした。何かをしたくないと思っている人たちに無理やりさせるのです。どうしてイエス様はこのように言われていたのでしょうか？少し情景を思い浮かべてみてください。この湖の舟に乗り込む直前、イエス様は男だけで5千人、女性と子供を合わせれば2万人とも言われる人たちを5つのパンと二匹の魚だけで養っていました。そして、その圧倒的な力を味わった人たちは、みんな興奮して、確信を持って口々に叫んでいたのです。この方こそ世に来られるはずの預言者、私たちがずっと待っていた救世主、私たちの王様だと。人々の期待や人気、歓声や情熱もイエス様だけに注がれて、その時まさにイエス様こそが注目の的になっていました。人々が歓声を上げている熱狂的な場面を十二人の弟子たちは見ていたのです。そして、見ていた彼らはその場を去りたいとは微塵も思いませんでした。彼らはこのように考えていたでしょう。私たちの主人が称賛され、群衆から認められているとはすごいことだと、このままいけばもっと大きなことがなせるのではないかと、弟子である自分たちにもさらに注目が集まるのではないかと、このようになすごく注目を集めている場所を離れたくない、この最高の気分に浸りたいと。弟子たちは群衆と一緒にあって、そこに居座りたいと思いました。舟に乗りたいとは思わなかったのです。しかし、そのような彼らに対してイエス様は「強いて」いたのです。人からの称賛にはいっさい興味がなかったイエス様は、このようなところにとどまっていなくて早く行きなさいと、彼らを舟に乗せて、その場から立ち去らせました。弟子たちの意志ではありませんでした。イエス様の命令でした。イエス様が行き先を命じて、そして彼らはその行き先に従って出ていったのです。そしてその結果、彼らはひどい嵐に直面することになるのです。

ヨハネ6：18－19の前半部分にこのように言われていました。彼らが舟に乗り込んだ後、このように続きます。「18 湖は吹きまくる強風に荒れ始めた。19 こうして、四、五キロメートルほどこぎ出したところ…」と。もうすでにご存じの方もいると思いますけれども、彼らがいたこのガリラヤ湖というのは、その地形から突発的な嵐が起きやすい場所でもありました。湖のまわりを丘に囲まれていて、そして深い谷間に存在していたこの湖には、丘に吹きつける冷たい風が勢いよく湖に流れ込んで、そして湖の温かい空気と混ざり合って突然、暴風雨や高波が生じることが多々あったのです。当時の人たちはそのようなことが起きることをよくわかっていました。予期せぬ時にそのようにして起こる嵐が、いかに荒々しく危険なものなのかをわかっていたのです。人々がわかっていただけではありません。覚えていますか？この舟に乗っていた十二の弟子たちの多くは、もともと魚を捕る漁師たちでした。すべてを捨ててイエス様についていく日までの数十年間、20年か30年の間、彼らはガリラヤ湖にあって毎日のように漁を行っていました。ですから人々が知っていた以上に、彼らほど嵐の危険性や嵐の中で舟をどのように扱うのかをわかっていた人たちはいなかったのです。エキスパートたちでした。湖のことなら何でも知っている専門家たちでした。舟の漕ぎ方についてもよくわかっていた人たちだったのです。けれども、そんな彼らにも今回の嵐だけは手に負えませんでした。その様子がマルコ6：47－48に「47 夕方になったころ、舟は湖の真ん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。48 イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、……」と書いていました。舟は湖の真ん中にありました。舟は吹き荒れている雨や風によって、もう動けなくなっていたのです。ここで向かい風のために「漕ぎあぐねている」と言われていました。これは弟子たちがなんとなく大変な思いをしていたことを言わんとしているものではありません。

▶「漕ぎあぐねている」

この「漕ぎあぐねている」ということばには、肉体的、精神的にも「激しい苦痛を覚える」や「苦しむ」という意味が含まれていました。「漕ぎあぐねる」というのは、漕ぐのが難しい状態ではありません。もう漕ぐのがあまりにも苦痛で、肉体的にも精神的にも参っている状態が「漕ぎあぐねる」ということばに意味として含まれていたのです。

想像できますか？ガリラヤ湖や舟の扱いのことをよく知っていた百戦錬磨の漁師たちが、もうお手上げですと、もう手に負えないと、嵐の中でもだえ苦しんでいたのです。彼らは死に物狂いになりながら、あちらこちらに痛みを覚えながら、恐怖の中で互いに叫んでいたでしょう。「もっと力強く漕げ」と。「舟が転覆しないように、真っ暗で何も見えないけれど、とにかく漕ぎ続けるのだ」と。彼らの置かれていた状況は大変でした。しかもこの大変さにもう一つ付け加えるのなら、嵐の中で弟子たちが苦しんでいた時刻は夜中の3時ごろと言われていました。彼らがイエス様のもとを去って、舟に乗り込んだ時刻は、夜9時ごろだと言われていています。少なくともこの時点で彼らは、陸を去ってから6時間ほど懸命に舟を漕ぎ続けていたというのです。真っ暗やみで先も見えない湖の真ん中で、だれにも助けを求めることができず、ひたすらに荒れ狂う中で、必死になって「漕げ、漕げ、漕げ」ともがき苦しんでいたのです。いったいどれほど彼らは痛みや疲れを覚えたのでしょうか？弟子たちの置かれていた状況は小さな問題ではなく、まさに悲惨なものでした。イエス様のもとを去る時に彼らは、自分たちの庭であるその湖に、何も問題はありません、渡ることなんか何の障害もありませんと思っていたでしょう。しかし、そんな彼らが湖で嵐に直面しました。何時間経ってもいっこうに岸に着くことはなく、体も心も疲れ果てていました。まわりを見渡しても一つの明かりも見えず、荒れ狂う風と波が次々に押し寄せて、次の瞬間にいのちがあるかもわからないような真っ暗やみの湖の真ん中で、彼らはずっといたのです。どのように足掻いても、必死に漕いでも置かれた状況には何の変化も見られませんでした。彼ら自身には手に負えない、文字通りいっさい希望のない状態に彼らはあったのです。

そして、皆さんここで考えてみてください。弟子たちはすごい苦しみの中にいました。イエス様は彼らがこの嵐に遭うことを知らなかったのでしょうか？彼らのことを舟に押しやって、送り出したイエス様は、弟子たちがこんな苦しみに遭うことをもともと何も知らなかったのでしょうか。山に残って祈っていたイエス様は、みるみるうちに黒雲が広がって荒れていく湖の様子を見ながら、愛する弟子たちをひどい目に遭わせてしまったとあわてふためいていたのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。イエス様は嵐が起こることをあらかじめ知っていました。そして、あらかじめ知っていたなお嵐の中に弟子たちを送ったのです。いったいどうしてでしょうか？それは彼らの信仰が成長するためでした。

覚えていてほしいのは、聖書の中には2種類の嵐が存在しているということです。信仰者が直面する嵐には2種類があります。一つは私たちが神様とそのことばに逆らって歩む時に経験する戒めの嵐です。私たちが神様やそのことばに逆らい、かたくなにみことばから離れて歩いていく時、私たちは戒めの嵐を経験します。覚えていますか？ヨナがまさにその嵐を味わっていました。神様から「ニネベの町に行きなさい。」と言われたにも関わらず、彼はそれを拒んで真逆の方向に行こうとしました。そしてその結果どうになりましたか？その結果、神様は暴風を文字通り起こして、そしてヨナの乗った舟は難破しそうになりました。神様は自分のみこころから離れて、罪を犯し続ける者をそのままよしとはされないのです。そのままよしとされない神様は、時に嵐を用いてまちがいを正して、みこころに従順に歩むようにと働かれることもあるのです。ヨナに起こったことは私たちに関係ないことではありません。私たちだって同じです。もしみことばの教えを私たちが知っていながら、それを自ら拒んで歩いていこうとするのであれば、私たちはそれゆえに苦しみや痛みを経験することがあります。神様はそれを通して私たちに「そっちではない」と教えようとするのです。そっちではないことに気づいて、神様の前に心から悔い改めて、赦しを求めるのであれば、神様は喜んで赦しを与え、その嵐を静めてくださるのです。

しかし、私たちが経験するのは、このような戒めの嵐だけではありません。もう一つは訓練のための嵐です。神様とそのことばに逆らって歩む者には戒めの嵐を与えられますけれども、神様とそのことばに忠実に歩む者には神様は時に成長のために嵐をもたらされることもあるのです。成長のために嵐、試練をもたらされることがあるのです。ケント・ヒューズというひとりの先生もこのようなことばを口にしていました。「もしモーセが燃える柴の前で、エホバに従わないと決心していたら、不満を言う民から拒絶されたと感じることもなかったでしょう、もしダニエルが神に忠実であると決心しなければ、ライオンの穴に直面することはありませんでした。もしパウロがタルソスに留まっていたなら、どれだけの迫害を避けることができたでしょうか。…そうです。キリストに従うことは、私たちを激しい嵐の中に導くこともあります。しかし、その報いはそれ以上に大きいのです。」と。

ある人たちは時に勘違いしてこのようなことを言います。「神様のみこころに忠実に従えば、その人は何の問題もない順風満帆な生活を送ることができますよ」と、「何も問題に遭わない生活を送ることができますよ」と。けれども、残念ながらそれは聖書が教えている真実ではありません。イエス様も言われていました。ヨハネ 16：33 でイエス様は弟子たちに向かってこのように言っていたのです。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と。弟子たちはイエス様に強いられて舟に乗りました。イエス様に従った結果、嵐に直面しました。信仰者が持つ平安、平和は、嵐に遭わない平安、平和ではありません。私たちが持つことのできる平安、平和というのは、嵐の中でもにいてくださる方のうちに見いだすことのできるものでした。弟子たちはそのことを個人的に知る必要がありました。そして、それを教えるためにイエス様は荒れ狂う湖の中、舟にやって来られるのです。

2. イエス様は嵐の中にいる者をご覧になられる方 19b-20節

次に、嵐の中で出会うイエス様の二つ目の特徴は、嵐の中にいる者をご覧になられる方です。イエス様は嵐の中に送るだけではありません。ヨハネ6：19の後半部分にこのように書いていました。「……彼らは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、恐れた。」と。嵐の中で疲れ果てていた弟子たちが目にしたのはイエス様でした。しかし、彼らの方が先にイエス様を見つけたのではありません。先に彼らの姿を見ていたのはイエス様でした。

もう一度、マルコ6：48をよく見てください。「イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが……」と言われていました。吹き荒れる雨風の真っ暗やみの中で、苦しんでいた弟子たちはイエス様の存在を忘れていました。自分たちの目の前の問題によって、パニックになって自分たちの力に頼ってどうにかしようと必死になっていました。そのような様子をイエス様は最初からご覧になっていたのです。彼らの弱さも恐れも、努力も葛藤も、彼らの味わう苦しみも痛みもイエス様はすべてを初めからご存じだったのです。

弟子たちの様子を見ていたイエス様は、どうしてこのタイミングで彼らに近づいていったのでしょうか？ どうしてイエス様は、嵐が起こったすぐ後に、弟子たちのところに行くのではなく、彼らが6時間もの間苦しんだ後で彼らのもとに行ったのでしょうか？ どうしてイエス様は見ていてなお待っていたのでしょうか？ 間違いなく言えるのは、イエス様に彼らを助ける力がなかったということではありません。嵐の中にいる者をご覧になられるお方は、その人たちにとって最も助けが必要なタイミングさえご存じだということです。嵐の中にいる人たちが最も必要なものを、必要なタイミングで与えることができるお方が、嵐の中にいる者を見ておられるイエス様でした。

少し自分のことに当てはめて考えてみてください。私たちもさまざまな試練に直面する時、最初の応答は弟子たちと同じようなものかもしれません。荒波に揉まれる中にあって、まず自らの手で必死になってもがいて、そして自分の手でどうにもならない時は人や物に必死にしがみついて、解決を図ろうとするのです。私たちがそのように苦しんでいる中で、私たちは自分が望んでいるタイミングや形で目の前にある試練が過ぎ去っていくことを願います。そして、自分のタイミングで物事が進まなくなってくれば、私たちは不満を覚えたり、恐れや失意を抱いたりするのです。私たちが自分のタイミングを持っている時、結局は自分自身の力や知恵に必死にしがみつこうとしているのです。けれども何も状況が改善されず、自分がいかに無力で弱い存在である事実気づいた時、初めて私たちはこれまでにしがみついていたものから手を離して、そしてその状況を変えることのできるお方、主の助けにすがらようになるのです。弟子たちにはそれがこの時でした。

湖の真ん中で自分たちのできることをすべてやって、そして自分たちにはもう何もない時にイエス様は来られるのです。イエス様はその者たちのことを見ていたので、彼らの苦しみに気づいていなかったのではありません。気づいていて最も必要なものを与えようとするのです。私たちのことを知っていてくださる神様は、愛する子どもを見守っている父親のように、助けを求める子に必要なものを喜んで与えられ、愛する羊を見守っている羊飼いのように弱った羊をそばで支えることのできるお方であると、私たちはいつも覚えることができます。嵐の中にあって弟子たちは苦しんで無力さを覚えました。そして、そんな無力さを覚えた弟子たちのもとにイエス様は歩いて行くのです。歩いて行くとあたりまえかのようにさっと読むかもしれません。しかし、すごい光景ではありませんか。熟練の漁師たちがもうお手上げで何もできないぐらい、その時の湖は荒れ狂っていました。吹きつけている雨風はあまりにも強くて、押し寄せていた波はあまりにも高いものでした。

私たちはそのような経験をしたことはないと思いますけれども、たとえば、台風が迫って来る中で、傘をさして外を歩いたことがあるでしょう。どうなりますか？ 雨が強く降っていると、目の前が真っ白になって、何も見えないことがあります。傘を持って歩いていると風が強く吹けば、まっすぐに歩くことすら難しいこともあります。急にビューンと吹く風に飛ばされないように私たちは慎重に歩いたりするの

です。風や自然の強さは私たちの手に負えるものではありませんでした。しかし、ここでのイエス様はそのような弱々しい姿ではありませんでした。イエス様はふらふらしながら舟のところにやって来たのではありません。イエス様は荒れ狂っている波さえも従えて、まるで平地を歩くかのように何事もなく波の上をまっすぐに歩いて来たのです。いったいだれがこのようなことができるのでしょうか？旧約聖書の著者たちは、人にはどうすることもできない力強い自然、強い波、水、海といったものを思いのままに静めることができるのは、それを造ったお方、ただまことの神しかできないことをよくわかっていました。

ダビデもこのように言いました。詩篇 65：7 に「あなたは、海のとどろき、その大波のとどろき、また国々の民の騒ぎを静められます。」と記されています。ダビデだけではありません。ヨブも口にしていました。ヨブ 9：8 でこのように言います。「神はただひとりて天を張り延ばし、海の大波を踏まれる。」と。まことの神にしかできないことでした。そして、イエス様は湖を何事もないように歩くことを通して、ご自身がまことの神であることを明らかにされたのです。人の手に全く負えない問題も、この方の前には何の問題にもなりません。造り主の前に、造られたものはすべてひざまずくしかなかったのです。

弟子たちは、まっすぐに自分たちの方にやって来るイエス様を見て、最初恐れを抱きました。ただでさえ暗やみの中で先が見えずに疲れ果てて、荒波におびえていた彼らは「幽霊が出た」と思って、さらに震えました。けれども、そのような彼らに向かって、あわれみ深いイエス様は言われるのです。「わたしだ。恐れることはない。」と。容易に想像できませんか？自分たちの無力さを覚えて、どこにも助けを求めることもできず、自分のいのちが危うい状態の中で、何の希望もなかった彼らが「わたしだ。恐れることはない。」ということばを聞いた時、どれほど慰められたのでしょうか。自分たちのことを見出してくださったお方によって彼らはどんなに安心したでしょう。

しかもイエス様はここで「わたしだ。」と言いました。さっと読み過ぎすかもしれません。しかし、これもすばらしいことでした。思い返してみてください。かつてイスラエルの民を導いた偉大なモーセも、とても大きな恐れを抱くことがありました。神様からエジプトに囚われている民をそこから連れて出ることをパロの前で言うようにと告げられた時、彼は恐れました。彼は自分には不可能だと思いました。その時代最も権力、権威を持っていたパロの前に立つことを恐れた彼は、それゆえに神様に尋ねたのです。

「もし自分を遣わせた方がだれなのかと彼らに聞かれたら、その時私は何て答えたらいいのでしょうか？」と。そしてそれに対して神様は答えたのです。何て言われたか覚えていますか？出エジプト記 3：14 に「神はモーセに仰せられた。『わたしはある』という者である。』また仰せられた。『あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。』と書かれています。「わたしは、『わたしはある』という者である」、それがモーセを遣わした変わることはない神様の個人的な名前でした。モーセから遠く離れた神様ではなくモーセとともにいる力強い永遠に変わらない神様でした。

そして、注目してほしいのは、イエス様がここで「わたしだ。」と口にしたこのことばを直訳すれば、これは「わたしは、『わたしはある』という者である。」だったのです。つまりイエス様は変わらない神様でした。燃える柴の中から怯えていたモーセに語りかけた神様は、嵐の中でおびえている弟子たちに同じように語りました。「わたしだ。恐れることはない。」と。そしてそれで十分でした。その神様の名のゆえに、モーセもまた弟子たちも心を支配していたどうしようもない恐れや心配は取り去られていくのです。この時、困難な嵐自体が消えていたわけではありません。それは変わらずにありました。しかし、近づいて来たイエス様を見て、イエス様が「わたしだ。恐れることはない。」と言った時、彼らはまるで嵐がなくなったかのようにふるまいました。その顕著な例はペテロでした。

私たちはよくペテロのことを悪く言うようなことがあります。確かにいろいろな場面で彼は失敗しました。しかし、同時に彼は必要な大胆さを持っていた人物でした。今、見ているヨハネには記されていませんけれども、同じことが書かれているマタイ 14：28－29 で、イエス様のことばを聞いたペテロの

応答がこのように書かれていました。「:28 すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」:29 イエスは「来なさい」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。」と。この光景を思い浮かべてみてください。ペテロはついさっきまでパニックになっていました。6時間漕ぎ続けた彼のからだは疲れ果てて、いのちを失うかもしれない荒波を前に大きな恐れを抱いていたのです。しかし、イエス様がやって来て、イエス様のことばを聞いた彼は全く違いました。彼はここでイエス様に対して「この荒波を先に静めてください」と願っていたのではありません。彼は同じ荒波を目の前にして、まるで何事もなかったかのように、舟から一歩足を踏み出すのです。すばらしいと思いませんか？愛する自分の主の姿にだけ目を留めていた彼は、まわりは変わっていなかったにもかかわらず主のもとへと一歩一歩進んで行こうとするのです。ペテロの心はただイエス様とともにいたい、それだけに向いていました。舟の中ではなくて、荒れ狂っている湖の上でイエス様のそばにさえいれば、そこに安心があると確信していたのです。

しかし、その後どうになりましたか？マタイは続きの30節でこのように書いています。「ところが、嵐を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください」と言った。」と。どうしてペテロは沈みかけたのでしょうか？それは彼の心がイエス様以外のものを見たからでした。イエス様だけを見ていた時は問題ありませんでした。しかし、イエス様以外の自分を脅かせていたものを見て、そしてまた戻ったのです。彼の目が彼の状況さえ支配しておられる主権者ではなく、その状況に目を奪われた瞬間、彼は沈み始めました。

そしてこれは今の私たちも同じではありませんか？普段、私たちもイエス様に目を留めている時は喜んでいますし、感謝もたくさんあります。しかし、何か大きな問題が起こった時に、その問題に心が支配されてしまえば、私たちは不安や恐れを抱くようになります。イエス様は変わっていません。まわりの状況を見始めただけです。私たちは主こそがすべての主権者だとたとえ知っていたとしても、それに疑いを持つことがあります。そのような弱さやかたくなさをここにいる私たちひとりひとは覚えたりするのです。しかし、そのような弱さを覚えている者をイエス様はどのように扱ってくださるのでしょうか？こわくなって叫び出して助けてくださいと言ったペテロに対して、さっきの続きの31節でイエス様はこのように言われていました。「そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」」と。確かにイエス様は、「信仰の薄い人だな。」と彼の信仰の薄さを非難もしていました。しかし、あわれみ深い主は疑ったペテロのことを溺れさせることはありませんでした。「主よ。助けてください」と叫んだ彼の手をすぐにつかまれていました。どんなに弱さや不安を抱えている者であろうとも、罪や過ちを犯してしまうような者であろうとも、主は助けを求めるその者にすぐに手を差し伸べてくださるお方だと言うのです。

いったいどれほどこの方は優しくて、あわれみ深くて、そして何よりどれほど忍耐深くいてくださるお方でしょう。そして、このような忍耐深いお方が私たちのことを良い時だけではありません、嵐の中でさえ見ていてくださり、ともにいてくださるのであれば、これ以上に私たちの心に平安と慰めをもたらすものはないのです。ご自分の愛する者を嵐の中へと送る方は、その後何もせず遠く離れて見ているだけではないことを忘れてはいけません。この方は私たちをいつもご覧になっていて、そして私たちが助けを求める時に、私たちに最も必要なものを必要なタイミングで与えてくださるお方でした。そのような愛に富んだお方こそ、私たちとともにいてくださるイエス様だったのです。

3. イエス様は嵐の中から助け出してくださる方 21節

そして、最後にもう一つ嵐の中で出会うイエス様の三つ目の特徴は、嵐の中から助け出してくださる方です。もう一度ヨハネに戻っていただいて、6:21はこのように締めくくっていました。「それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。舟はほどなく目的の地に着いた。」と。荒れ狂った嵐の中、湖の上を歩いて舟へとやって来られたイエス様を弟子たちは喜んで迎え入れていました。そして、その後どうなったか

と言うと、イエス様が舟に乗ったその瞬間それまでだれの手にも負えなかった嵐や波がやみました。確かにイエス様に静めることのできない嵐なんて一つもなかったのです。こうしてイエス様はご自分こそが自然界も含めてすべてのものの支配者であること、主権者であることを明らかにされました。

さて、この方の圧倒的な力を目にした弟子たちは、イエス様の前で何をしたと思いますか？彼らはこの時初めてイエス様の前にひざまずいて、口にしました。マタイ 14 : 33 にこのように書いていました。「そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、『確かにあなたは神の子です』と言った。」と。皆さんに覚えていてほしいのは、この時点まで弟子たちはイエス様に従っていながらもイエス様がだれなのかをまだ模索していたということです。たとえば、思い出してください。同じように激しい嵐を静めた場面がありました。激しい嵐をイエス様は眠っていた後、起こされて、激しい嵐を静めたのです。そしてイエス様の姿を目にした彼らは、驚きと不思議に満ちてこのように口にしていました。マルコ 4 : 41 に「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『嵐や潮までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。』」と書かれています。圧倒的な力を前にして、彼らはイエス様がいったいだれなのかと疑問を抱いていました。そして、今回の直前に起こった出来事にしても同じです。この湖を歩く前、イエス様は五つのパンと二匹の魚で、大ぜいの人たちを養っていました。こんなにもすばらしい奇蹟を実際に目の当たりにさえすれば、自分も容易にイエス様のことを心から受け入れるのにと、今の私たちなら思うでしょう。しかし、実際はそうではありません。このようなことばが、きょう何回も見ているマルコ 6 : 51 - 52 に書いてありました。「:51 そして舟に乗り込まれると、嵐がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。:52 というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。」と。驚くべきことに、最も身近にいた十二人の弟子たちも、目の前で行われていたイエス様の偉大なしるしを何度も何度も目にしながらも、その方がだれなのかを完全にはわかっていませんでした。彼らの心はかたくなでした。多くの教えを聞いて、数々の奇蹟に驚きを感じていたとしても、かたくなで未熟な彼らはまだまだたくさんの疑問を抱えていたのです。「イエス様はいったいだれなのだろうか？」と。しかし、そのような彼らが今回、この嵐を通して気づくのです。そして、気づいた彼らはひざまずいて礼拝をささげていました。「確かにあなたこそ神の子です」と。

ここでどうしてこの嵐が弟子たちにとって必要だったかを感じませんか？彼らの信仰の成長にとって、今回の嵐は欠かせないものでした。弟子たちのことを愛しておられ、彼らの心のうちをご覧になっていた主は、彼らにとって最も必要なものを与えました。表面的な彼らの安全ではありません。その代わりに彼らの心を砕く、へりくだらせる試練を与えました。そして、その結果として彼らは自分たちの無力さを知っただけではなく、嵐の中から自分たちを救い出せる唯一の存在、神の御子イエス・キリストがだれなのかを自分のこととして深く知ったのです。それがイエス様が嵐を通して彼らに教えようとしたことでした。嵐の中に送ることのできる方は、嵐の中にいる者をご覧になっておられ、そして嵐を通して人々を心から礼拝する者へと変えることのできるお方でした。

私たちも同じです。私たちが試練を経験する時、その試練を通して神様は私たちをキリストに似た者へと変え、そして私たちがますます神様を礼拝する者へと変えようとされるのです。そしてその目的を果たせば、この後、この方は嵐を容易に静めて、その舟をあるべき目的地へと導いたのです。嵐さえ思いのままに用いることのできる主権者にとっては、嵐から助け出すことは何の問題もありませんでした。十二人の弟子たちはイエス様に忠実に歩んで、そして試練に遭いました。私たちも同じです。イエス様とともに歩む信仰生活は常に問題がないということではありません。私たちが忠実に、誠実に歩もうとするのであれば、その歩みには時に向かい嵐が吹くことがあります。私たちを成長させようとするあわれみ深い神様が、あなたの成長のために嵐をもたらすことがあります。しかし、その中であつても私たちは希望を失う必要はないのです。私たちを嵐へと導かれるお方が、私たちを離れることなくいつも見守ってください。そしてへりくだって助けを求めるなら、私たちにとって最も必要な助けを与えてくださ

るからです。嵐を支配しておられるお方が私たちとともにおられ、そして私たちを最後にはあるべき場所へと導いてくださるのです。それが、私たちが嵐の中で出会うイエス様の姿でした。

きょうの最初に見たジョニーもこのようなことばを残しています。「本当の満足は、神様の動機を理解することから来るものではありません。神様の御性質を理解し、神様の約束を信頼し、全てをご存知で、全てを良く行われる主権者としての神様に拠り頼み、安らぎを見出すことにあるのです。」と。嵐の中でともにいてくださるお方が私たちの変わらない希望の源でした。その方に心を留めて、この1週間もともにこの方の栄光のために歩んでいきましょう。